

1930 年代の新疆をめぐる日本の情報活動

2021/05/22

拓殖大学 澤田次郎

はじめに

- 1 新疆における初期の情報活動
- 2 ソ連の新疆進出に対する警戒
- 3 北田公使と日英情報協力構想

おわりに

.....

はじめに

新疆： シルクロード、東西文明の交差点

地政学上の「ハートランド」

西のロシア、南の英領インド、東の中国の狭間にあり、パワーポリティクスの舞台
1930 年代の新疆省は中華民国の統治下にあるも、距離が遠いためコントロール不可、独自性を強めていた。

地理上の新疆

通常の陸路：北京→西安→蘭州→ハミ（途中まで汽車、約半年間）

後のルート：北京→天津→神戸→敦賀→ウラジオストク→（シベリア鉄道）→ノヴォシビルスク→（トルキスタン・シベリア鉄道、1930 年全線開通）
→途中下車して陸路、タルバガタイまたはイリに入る

日本にとっての新疆：

帝政ロシアの浸透→清国保全を崩す（一種のドミノ理論）との見地から一部で注目
ソ連の「赤化ルート」「援蔣ルート」
→日本の関心、関与

★主な先行研究

- ① 新免康教授の一連の論考→1930 年代の新疆の政治状況
- ② 中田吉郎「新疆ウイグル自治区と日本人」(1) ～ (7)『アジア・アフリカ資料通報』21

巻5号～23巻5号、1983年8月～85年8月

- ③ 王柯『東トルキスタン共和国研究—中国のイスラムと民族問題—』（東京大学出版会、1995年）→第2章第1節「日本の新疆進出」
- ④ 菅原純「ウイグルと大日本帝国」『アジア研ワールド・トレンド』11巻1号、2005年1月
- ⑤ 関岡英之『帝国陸軍 見果てぬ「防共回廊」—機密公電が明かす、戦前日本のユーラシア戦略—』（祥伝社、2010年）……新版2019年
- ⑥ 野田仁「日本から中央アジアへのまなざし—近代新疆と日露関係—」『イスラーム地域研究ジャーナル』第6巻、2014年3月
- ⑦ 櫻井良樹「新疆と近代日本との関係史スケッチ」『中国研究』第22号、2014年12月
- ⑧ 寺山恭輔『スターリンと新疆—1931-1949年—』（社会評論社、2015年）→第4章（3）「ソ連の新疆政策における日本ファクター」
- ⑨ 中生勝美『近代日本の人類学史—帝国と植民地の記憶—』（風響社、2016年）
- ⑩ 中生勝美「歴史認識と人類学—満鉄資料『新疆ニ於ケル楊柳青人』の分析を通じた日本帝国主義の新疆戦略—」『桜美林論考 人文研究』第9号、2018年3月

-
- ⑪ Lars-Erik Nyman, *Great Britain and Chinese, Russian and Japanese Interests in Sinkiang, 1918-1934* (Sweden: Esselte Studium, 1977)
 - ⑫ Andrew D. W. Forbes, *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: A Political History of Republican Sinkiang 1911-1949* (Bangkok: White Lotus Press, 2010)……原版1986年
 - ⑬ Hsiao-ting Lin, *Modern China's Ethnic Frontiers: A Journey to the West* (London and New York: Routledge, 2011)

④菅原

- ・外務省のファイル『新疆政況並（及）事情関係雑纂』第1～9巻
- ・1926（大正15）年～1944（昭和19）年の20年間をカバー、合計約7,500ページ
東トルキスタン・イスラーム共和国の独立運動が過熱した1933（昭和8）年以降の文書が全体の97%を占めており、そのころに日本政府は新疆への注視を強めたことがうかがえる。
- ・しかし1939（昭和14）年を過ぎたころから『雑纂』の記事は激変、日本政府が新疆への関心を失ってきたことを意味する。

⑦櫻井

- ・新疆は中国を越えた遠い位置にあるため、実際の関わりよりも、周辺諸国（とくに中国とロシア・ソ連）との関連において捉えられる地域であった。
- ・日露戦前から日露戦後にかけては、ロシアの南下に対する危機感から、日本の第一の関心

は同国の影響が新疆にどのように及んでいるかを知ることであった。

- ・ 1911（明治 44）年に辛亥革命が勃発し、中国自体の前途が危ぶまれたときの日本の関心は、中国とくに満蒙にいかに関係力を確保していくかであり、シベリア出兵前後を除いては、新疆への関心は薄かった。
- ・ しかし 1928（昭和 3）年、新疆省政府主席の楊增新が暗殺され、金樹仁がそのあとの実権を握り、金の下でソ連の影響力が増加すると、新疆内での政治的・民族的対立が増大し、再び日本の関心が高まる。

→ 先行研究の多くが日本の情報活動、諜報に部分的に触れてはいるが、それに焦点を絞った研究は、管見の及ぶ限りでは見当たらない。

→ とくに 1930 年代を中心とした新疆をめぐる日本の情報活動の大まかな全体像をさぐるものが本報告の目的

.....

1 新疆における初期の情報活動

明治～大正期

主な新疆訪問者（第 1～3 次大谷探検隊などを除く）

(1) **西徳二郎**（前駐露代理公使）

1880（明治 13）年、日本への帰国途中、ロシア領中央アジアのウェルヌイ（現アルマトイ）からイリ地方に入り、約 3 週間視察。

『中亜細亜記事』（1886 年、陸軍文庫）：イリ河「上流ノ谷間ハ所謂イリ地方ニシテ、天山西北部中、最モ豊沃ナル土地トス」

旅行の動機：イリ事件（1871 年）、国境画定（1881 年）＝ロシアの東方進出

→ **福島安正**（前駐独ベルリン公使館付武官）

1892（明治 25）～93 年、日本への帰国途中、シベリア単騎横断旅行。

サンクトペテルブルクで西徳二郎公使からアドバイスを受ける

当初の計画では、ロシア領中央アジアからイリに入り、新疆を視察した上でモンゴル、シベリアに向かう予定であったが、予算の関係で新疆は断念。

旅行の動機：ロシアの中央アジア鉄道、シベリア鉄道建設＝ロシアの東方進出

(2) **波多野養作、林出賢次郎、桜井(肥田)好孝**（東亜同文書院第2期生）

1905（明治38）年出発、北京→西安～蘭州～肅州（現酒泉東部）→新疆のハミ、トルファン、ウルムチへ

日英情報協力→ロシアの浸透状況を調査

イギリス：インド国境から新疆省西南部のカシュガルまで

日本：新疆省西北部のイリからモンゴルのコブト、ウリヤスタイ、クーロンにかけて
外務省より東亜同文書院（根津一院長、陸軍少佐）に調査員派遣を依頼

調査終了後→1907（明治40）年、外務省から福島安正参謀次長経由で根津院長に3万円が交付、以後、東亜同文書院生による本格的な中国調査旅行が始動

（Cf. 藤田佳久『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』2000年、大明堂）

波多野：ウルムチを中心に滞在、イリ、トルグート（トルホト）郡王府も訪問

（約11ヶ月）

『新疆視察復命書』（外務省政務局、1907年）

- ・ウルムチ、イリ、タルバガタイ、カシュガルのロシア領事館には多数のコサック兵配置（すべて実見したわけではない）
ウルムチには100名以上のコサック、イリには300名以上の歩騎兵
ロシアは纏頭回（ウイグル人）を懐柔するためウルムチやイリに回教寺院建築
- ・イリ将軍・長庚が新式の練軍を育成中、3個師団編成をめざす。ウルムチに1万8,000の練軍、4営の馬隊、16門の砲あり

林 出：ウルムチ、イリ、トルグート郡王府、タルバガタイに滞在

（約1年2ヵ月、とくにイリは5ヶ月）

『清国新疆省伊犁地方視察復命書』（外務省政務局、1907年）……写真あり

- ・イリ：
ロシア人の居留地は露国風の市街をなし、商業が盛んに行われ、ロシア商民は2,500人。領事館には300名の兵（うち200名は騎兵）
ロシアは従来の冒険的併吞を改め、着実な手段で経営を進めているが、「後日一挙シテ新疆ヲ呑ムノ魂胆」

桜 井：ウルムチ、グチュン（旧名古城、現奇台）に滞在

（約5か月）

- ・モンゴル視察が主体
- ・ロシアは新疆蒙古に自国商人の移住を促した結果、僻遠の地にもかかわらず、この二境には予想外に多数のロシア人が蔓延している

以上 3 名は主に天山北路（新疆北部）を旅行

(3) **日野 強**（陸軍少佐）

参謀本部が派遣／「潜入」ではなく「公然手段」によるもの

福島安正のアドバイス：「視察旅行は汽車よりは馬車、馬車よりは騎馬、騎馬よりは徒歩にしかず。旅行の苦樂に応じて、その得るところは反比例をなす」

1906（明治 39）年出発、北京→保定→西安～蘭州～肅州→ハミへ

* 直隸省の保定に立ち寄る

- ・ 当時、日本陸軍は「対清友好工作」を実施中
清朝政府に協力し清国の新軍建設を支援（直隸総督・北洋大臣の袁世凱や肅親王が推進）
- ・ 日本側の意図：清国の新軍に影響力を及ぼし、その育成をはかり、ロシアへの盾とする
- ・ 東京の振武学校（福島が学生監理委員長）でまず清国留学生を受け入れ、陸軍士官学校に進学させた上で、清国に送り返す→新軍参加
- ・ 日野の新疆旅行はこの「対清友好工作」の一環に組み込まれていた。
北京で公使館付武官の青木宣純大佐、坂西利八郎中佐の斡旋尽力を得つつ準備
保定に 3 日間立ち寄り、多賀宗之大尉に会う（多賀は袁世凱が軍事顧問として招聘）
保定では現地の新軍と軍官学堂を見学→上原多市を連れて出発

* その後の旅程

【天山北路】

ハミ→トルファン→ウルムチ→タルバガタイ→イリ→

【天山南路】

クチャ→アクス→カシュガル→

【さらに南部】

ヤルカンド→カラコルム山脈を越えて英領インドへ

（以上、新疆滞在約 8 ヶ月）

日野『伊犁紀行』上巻・日誌之部／下巻・地誌之部（博文館、1909 年）

● 対清友好工作

* トルグート（トルホト）郡王府訪問 （前出・波多野、林出も）

トルグード郡王・パルタは当時、東京の振武学校に留学中
(Cf. 横田素子「土爾扈特郡王帕勒塔の来日に関する一件」『中日文化研究所所報』第
5号、2006年12月)

* イリ

イリ将軍・長庚（保定の軍官学堂出身者を招いて日本式訓練導入）
日野は長庚と交流、文武官の「歓待厚遇尋常ならず」
日野と同行して来た上原多市は長庚によりイリの武備学堂の総教頭に就任、その後4年
余りにわたって軍事教育を担当

●情報収集

* 新疆駐屯のロシア兵力

イリ（総領事館）……護衛兵約200騎と砲2門
タルバガタイ（領事館）……護衛兵約30騎
ウルムチ（領事館）……護衛兵約40騎
カシュガル（領事館）……護衛兵約60騎

* 新疆の清朝軍兵力

全兵力は約5～6,000人、歩隊42営、馬隊31旗、砲40門（旧式黄銅砲）
このうちウルムチ撫標のみ新式軍隊で、その他は旧式
銃は廢銃同様のものが多く、兵隊の素質は決して良くない、将校も概して素養がない
イリ将軍・長庚のようにこれから軍隊の改善に勉めようとする者がいるので、その点
からいえば、「将来大いにみるべきものあらん、ただその進歩の遅々たるを恨むのみ」

* ロシア商人の概数

総計約1万人を下らない。
イリ地方……約5,000人
タルバガタイ……約2,000人
カシュガル……約1,000人
ウルムチ……数100人

* 商業

ロシアから更紗（木綿の染め布）、陶製・鉄製の食器、毛織物、砂糖、染料、および
日用雑貨が流入

* 資源

新疆は至るところ鉱物に富み、金、銀、銅、鉄、鉛から石炭、石油、塩の類に至るまで、ことごとく埋蔵されている。

* 鉄道

中央アジア鉄道については、タシュケントを越えてアンディジャンまで到達。そこから新疆まで駄獣路があり、電線は国境まで、駅伝はカシュガルに達している。

シベリア鉄道は、オムスクで下車後、イルティシ川を汽船で上りセミパラチンスク（現セメイ）まで行き、そこから陸路新疆に通じる。ロシアは近時、タシュケントよりセミパラチンスクを経てトムスクに至り、シベリア鉄道に連結する鉄道を敷設すべく、腐心計画している。〔のちのトルキスタン・シベリア鉄道、略称トルクシブ鉄道〕
→ロシアは両鉄道を使って「迅速に国境に入り得る」

【日野の結論】

- ① ロシアの勢力は隆々として日にその地歩を固め、新疆省全土を露化しないではいられない勢いがある。これに対して清国は鉄道の敷設はもちろん、一も見るべきものがなく、今日その対抗策を講じつつあるも、時機すでに遅しといわざるを得ない。
- ② 新疆は清国の領土であり、その喪失は老大帝国瓦解の前触れとなる。千丈の堤も蟻の穴からついでることを思えば、どうして寒心しないでいられようか。清国保全を大方針とする日本はこれを対岸の火災視できない。

・その後、1916（大正5）年より佐田繁治（在郷軍人下士）が「宗教研究」を名目としてウルムチに滞在、支那駐屯軍のため諜報活動。佐田はタルバガタイ在住の日本人仕立屋、および日本人芸妓3名と連絡をとりながら活動していたといわれる。

（4）成田哲夫少佐一行

1918（大正7）年5月17日、日華共同防敵軍事協定の調印

ロシア革命（1917年）→ロシアの単独講和（ブレスト＝リトフスク条約、1918年3月）

→日本政府はドイツ、ロシア勢力の東漸を憂慮

シベリア出兵を行う場合、その側面（外蒙古、新疆からの攻撃）の安全を確保する必要

【新疆では以下が約2年間近くにわたり情報収集】

タルバガタイ（塔城）……田島栄次郎大尉、太田資事、佐田繁治

イリ（伊犁）……長嶺亀助大尉、佐藤甫

ウルムチ（迪化）……成田哲夫少佐、金子信貫、大瀧太吉

カシュガル（喀什噶爾）……相場重雄大尉、富永三生

（長嶺秀雄「1918年締結の日華共同防敵軍事協定について」『軍事史学』11巻3号、1975年12月、同「軍人のシルクロード紀行」『軍事史学』25巻2号、1989年9月）

外蒙古、新疆を合わせた陸軍省の経費

一時費 約20,000円

維持費 月額約5,600円

★しかし、成田少佐一行の新疆調査後、日本政府は新疆に浸透し続ける意図をもたなかった。

【参謀本部】

- ・成田、楊増新（新疆陸軍学堂総弁）より諸道の鉱産を担保にグチュン（古城）～タルバガタイ（塔城）間の軽便鉄道敷設ができないものか依頼される
- ・参謀本部に日本側出資者の有無を問い合わせ→かかる遠隔の地では何人も求めに応じないだろうとして「一言の下にはねつけられ」た。

【外務省】

- ・成田、新疆の鉱物資源（石油、石炭）も調査し、報告書（1919年5月付）を提出、利権獲得に期待。
- ・ところが、一行が帰国後の1920（大正9）年10月、中国とイギリスの間で新疆の合弁石油採掘事業が決定される。
- ・これを聞いた成田中佐（当時、金沢歩兵第7連隊）、外務省の芳澤謙吉政務局長に「甘粛省の石油鉱」（1919年5月6日付）の報告書を送付、甘粛省の石油開発を勧める。
- ・芳澤局長は却下→甘粛省は何分遠隔のため、日本の実業家で該地方まで踏み込んで事業を企てようとする者は「絶無」、外国人に利権を収められるのは小生も頗る遺憾であるが、「時機ノ到来ヲ待ツノ外無之ト存候」。
- ・ただし結局、中英合弁事業は楊増新ら省議会の反対で見合わせに。

●日露戦争直後、あるいはロシア革命直後、ロシアから何らかの脅威を受ける可能性がある一時期においては、外務省・陸軍は新疆で情報活動を行った。しかしその後は、距離の遠い新疆に経済進出、浸透工作を行う気はなかった。

●1923（大正12）年、谷寿夫中佐が新疆にロシア監視スポットを設けることを提案したが、実現せず。

.....

2 ソ連の新疆進出に対する警戒

ソ連の新疆に対する経済的進出

1924（大正 13）年、ソ連と新疆省政府の間で通商協定

- ・相互に領事館を設置すること、自由貿易・貨物の不可侵・自由運送を規定

→ソ連の基礎が固まり、中国への本格的活動の開始を示すもの

（入江啓四郎『支那辺疆と英露の角逐』ナウカ社、1935 年）

ソ連領事館：ウルムチ（総）、カシュガル（総）、イリ、チュグチャク、アルタイ〔シャラス
メ〕

中国領事館：タシュケント、アンディジャン、アルマ・アタ、セミパラチンスク、ザイサン

以後、1925（大正 14）年から 1932（昭和 7）年にかけて、ソ連から新疆への輸出が拡大、
ソ連の新疆に対する経済的支配が強まる。

【両国間の貿易額】

1923-24 年 新疆→ソ連 3,015,000 ルーブル

 ソ連→新疆 418,000 ルーブル

1932 年までに 新疆→ソ連 12,305,000 ルーブル（4 倍）

 ソ連→新疆 15,698,000 ルーブル（38 倍）

（Michael Dillon, *Xinjiang and the Expansion of Chinese Communist Power*, London and New York: Routledge, 2014）

新疆の政治的混乱

- ・ 1928（昭和 3）年 7 月、新疆省政府主席の楊增新が、樊耀南（軍務庁長・外交署長）らに暗殺され、11 月、金樹仁が新主席に就任。
- ・ 金樹仁はソ連と貿易協定を締結し、ソ連の経済的進出が進展。
- ・ 1933（昭和 8）年 4 月の政変により金樹仁は失脚、劉文龍が省政府臨時主席となる。
- ・ しかし新疆边防督弁の盛世才が劉を退けて実権を握る。
- ・ 他方、1931 年にハミ（コムル）で、翌 32 年にトルファンで、漢族中心の新疆省政府に対するイスラーム教徒の反乱が起こり、それに回族の馬仲英軍も参加。以後ウイグル人の蜂起が相次ぐ。
- ・ 1934 年、東トルキスタン・イスラーム共和国が誕生、しかし実質的に 3 ヶ月で瓦解。

- ・そうした中で盛世才が1934年、ソ連軍の支援の下に馬仲英軍を破り、ムスリムの反乱を鎮圧した上で混乱を終息させ、ソ連の援助を受けながら統治を行っていく（1940年に新疆省主席に就任）。

1930年代における日本の新疆監視スポット（大公使館、領事館、駐屯軍、武官府など）

ソ連：モスクワ、ノヴォシビルスク

満洲：満洲里、新京（長春）

内モンゴル：厚和（フフホト）

中国：張家口、北平（北京）、天津

上海、南京、漢口

インド：カルカッタ

アフガニスタン：カーブル

【外務省・陸軍の情報収集手段】

- ・大部分は新聞・雑誌のオープンソース（中国紙、タス通信）
- ・国民政府関係者からの聴取（南京）
- ・新疆省政府の派遣者からの聴取
- ・中国領事からの情報提供（ノヴォシビルスク）
- ・「諜者」「諜報者」の利用（南京、上海／武官）
- ・暗号電報の解読（陸軍「特種情報」）
- ・新疆から帰来の民間人からの聴取

【成功例】

(1) トルクスタン・シベリア鉄道（以下、略称のトルクシブ鉄道を用いる）

「この鉄道が完成されれば、新疆に至る道路を短縮し、ソ連の文化・政治・経済的影響は従来より一層増進されるであろうから、この点はとくに注意する必要がある。」

（1927年9月22日付・在満洲里 田中文一郎領事より田中義一外相）

1930年、トルクシブ鉄道開通

在ノヴォシビルスク日本領事館、太田通訳生に鉄道を視察させる。

ノヴォシビルスク→（トルクシブ鉄道、中央アジア鉄道）→タシュケント、サマルカンド、コーカンドを経て、サマラよりヴォルガ川をのぼりカザンまで

太田通訳生の報告

- ・沿道は水が乏しく、給水は機関車に供給するのが精一杯。各駅に着いても洗面や口をそそぐための水さえ得られず、外は熱砂が舞い上がるため苦熱を感じ、アルマ・アタ、オアシ

ス地帯を除く全区間は「実ニ難行」。

- ・車内は概して不潔、南京虫の巢生は驚くばかり。
- ・ソ連領中央アジアの住民の間には、圧制政治と生活の窮迫により不平不満が蔓延。

この旅行→ソ連当局に知らせず、「全然微行ノ姿」で実施したが、途中妨害を受けずに 8,000 キロを突破したのは「大成功」。

ただしノヴォシビルスク出発以来、GPU（国家政治保安部）の要員が監視尾行、乗車の便宜をはかってもらう。

→翌 1934（昭和 9）年、外国人のソ連領中央アジア旅行は禁止

【情報の遅延】

1928（昭和 3）年 7 月、新疆省政府主席の楊增新が暗殺され、11 月、金樹仁が新主席就任

↓

「露国は共産党をして新疆省主席・楊增新を暗殺し、この機会に乗じて居留民保護の名目上、同省に多数の軍隊の輸送を了した」

（1928 年 11 月 21 日発着・在北京 堀代理公使より田中外相宛）

1932（昭和 7）年 12 月、トルファンで反乱

→翌 1933 年 1 月、タス通信により第 1 報が入ったが、その後、情報入らず

↓

「新疆より奉天に來た蒙古人・王立国の談によれば、トルファン居住の回教徒は統治者の圧迫、苛斂誅求に苦しみ、ついに暴動を惹起した」

（1933 年 2 月 14 日付・関東庁警務局長より拓務次官ほか宛）

↓

「楊增新が主席であった当時は回教徒の意見を尊重した施政を行っていたが、金樹仁が楊を打倒して主席となるや、回教徒を駆逐して独断専制を施したため、回教徒の憤怒を激発し、今次紛乱の因となった」

（1933 年 5 月 3 日付・在南京 上村伸一総領事代理より内田外相宛）

東トルキスタン・イスラーム共和国の誕生

（1933・昭和 8 年 11 月 12 日～34 年 4 月 16 日）

反新疆省政府（反中華民国政府ではない）、親英的

名目上、カシュガル、アクス、ヤルカンド、ホータンの各地域を包含（アクスは実質上疑問）
総統 ホジャ・ニヤズ・ハジ（ハミ反乱の指導者であったが、1933年6月に盛世才の省政府と協力協定を締結、のちに首相サビト・ダムッラを捕縛して省政府に引き渡す）

首相 サビト・ダムッラ

軍事力：ホジャ・ニヤズ・ハジの軍隊／ホータン政府をつくっていたムハンマド・エミン・ボグラの軍隊／カシュガルのウズベク軍とキルギス軍の3部分が分立

→複数の軍事的、政治的勢力の名目的な結合体

→周辺国に使節を派遣したが、各国は承認せず

（新免康『『東トルキスタン共和国』（1933～34年）に関する一考察』『アジア・アフリカ言語文化研究』第46・47合併号、1994年3月）

共和国誕生の第1報

1934年1月24日・モスクワ発、聯合〔新聞聯合社〕への配信 第8号「◎新疆省に回教徒の独立政府樹立さる」

↓

外務省、陸軍に伝わる

↓

しかし情報が錯綜

「昨今新聞に伝えられている南部新疆の独立は事実である」

（1934年1月29日発・北平輔佐官より参謀次長宛「何応欽ノ談」）

* 何応欽は当時、軍事委員会北平分会会長代理

⇔

陸軍参謀本部、1月31日発・南京参謀本部より盛世才督弁宛の暗号電報を解読

「最近のソ連電はカシュガルに独立政府が成立したと伝えているが、真相如何、詳細調査の上、至急報告されたい。辺境多事の際、貴官等の協力支持に期待せざるを得ず、切に努力せられんことを望む」

→何応欽は共和国独立を事実視／南京参謀本部は真相不明で盛世才に問い合わせ

→最終的に外務省が共和国の概要を明らかにしたのは誕生から1年後

昭和10年3月、在張家口日本領事館・池田書記生『新疆ノ回教暴動』

……政府主要人物、憲法の主要条文、政治思想（民族主義、反漢人、反ソ連）を紹介

その一方でソ連の新疆浸透の情報が続々と入る

【外務省の総括】（1935 年 6 月）

- ① 新疆省の実権を握る督弁・盛世才はソ連の「ロボット」である。
- ② もっとも強い実権を握るのはソ連側の政治監察管理局である。総務（科長王立祥）、政治、軍事、経済、国際、検査の各科に分かれ、局長はボウゴニン、副局長は張英吾。
- ③ 省政府に招聘され、重要職務に関与する主なソ連人は次の通り。
軍事顧問 メリコフ（あるいはマリコフ、マリニコフとも伝えられる）
政治顧問 バクーニン
財政顧問 ミハイルマン
- ④ 盛世才の馬仲英討伐に際し、ソ連は赤軍二個連隊（兵数 3,000～4,000）と飛行機 10 台、装甲自動車などを送ったが、平定後、ソ連軍は撤退。
- ⑤ ソ連の主眼とするところは、もっぱら北部新疆方面をその勢力下に収めて、支那本部の共産分子との連絡路を確保線とするにある。したがって裏面より新疆の支那政権を援助し、これを利用しようとしている。
- ⑥ コミンテルンは中国共産党ないし中華ソヴィエト政府との直接連絡の目的実現のため、とくに新疆の赤化工作を強化。モスクワ東北大学および中山大学出身の支那人留学生を主とする有力指導員約 30 名を最近において同地方に密派した。
- ⑦ 中国共産党の主要メンバーは以下の通り。
書記 李虎灘
情報部長 湯有麟
連絡部長 ステパン・スクヴォルツォフ

→同時期の陸軍も同様の見方。

関東軍も政治監察管理局に注目し、これが「新疆赤化の策源地」とする。

→外務省、陸軍に共通する視点

「日本にとって危険であるのはソ連の思想と組織が新疆—四川—福建のラインに沿って中国に浸透することだ」（1933 年 12 月、土肥原賢二・奉天特務機関長）

しかし日本側は 1 次資料がないため苦慮

情報員の派遣をめざす

① 今田新太郎少佐一行の派遣

中国側の許可を得て、1933（昭和8）年10月、上海から蘭州へ、しかし新疆内乱のため飛行機が停止、引き返す

② 広田弘毅外相、1933年11月、新疆に人員派遣を希望

「新疆省最近の事態について我方が重大な関心を有することは御承知の通りであるが、当方は新疆の実情について確実な情報の入手に種々苦心している。そのためノヴォシビルスクを根拠として新疆（カシュガルを主とし、できればイリ、タルバガタイ、ウルムチ方面も）に人（本邦人が望ましいが、やむを得なければ外国人でも可）を派遣し、実状を踏査させたい。在ノヴォシビルスクの小柳領事にこのことを知らせ、先般、中央アジア旅行の経験がある太田通訳生の意見も徴し、派遣の実現可能性について知らせてほしい。」（1933年11月11日発・広田外相より在モスクワ 大田大使宛）

↓

太田通訳生の意見

ノヴォシビルスクではソ連側の厳重な国境監視のため、確実な情報の入手は甚だ困難。

諜報上有用な当地在住の中国人も日中関係の悪化により領事館の接近してこない。

セミパラチンスクが新疆との交通上便利なので、そこに人員を住み込ませるのがよいが、適任者が見つからず、その実現には相当時日を要する。

（1933年11月29日発・在モスクワ 大田大使より広田外相宛）

↓

太田通訳生自身、ノヴォシビルスクからソ連領中央アジアに向かったが、ノヴォシビルスクの南230キロのバルナウルでGPUに探知され、失敗、引き返す（1934年2月26日発・在ノヴォシビルスク 小柳領事代理より広田外相宛）

③ 笹目恒雄（善隣協会主事）の派遣

モンゴル人のラマに変装、チベット、新疆潜入をめざす。

参謀本部、外務省の共同事業（参謀本部3,000円、外務省2,000円を支出）

1935年2月、百霊廟を出発するが、翌36年7月、西寧において拘引投獄され、11月に鄭州の日本領事館に引き渡される。

逮捕の理由は銃を5挺所持していたこと。

● 「辺境事情調査要目」

新疆：

（イ）一般政情

- A 北部新疆において迪化政権に対するソ連人の関与、回教徒参与の実情
- B 南部において回教各派および東干族の分布、社会組織、自治運動の現状
- C ソ連領トルキスタン、アフガニスタン、カシミール方面回教徒と省内の回教徒との関係
- D 回教徒赤化の可能性
- E 省政府軍の構成

(ロ) 経済事情

- A 対外貿易に関し貿易の方法、機関などについて、またソ連の指導または財政的援助があると称せられる省内開発状況
- B 支那人の活動状況、本部との交通、通商状況

④ 池田克己（在張家口日本領事館書記生）の派遣

外務省、関東軍特務機関の共同事業

1936 年 9 月、張家口出発。綏遠→百霊廟→阿拉善〔アラシャン〕→額済納〔エチナ〕からハミに入ることをめざす。

百霊廟より額済納特務機関員とともに自動車で額済納に赴いたが、綏遠事件が起こった余波で額済納特務機関は孤立、連絡不能に。

池田は肅州に南下して新疆潜入を試みるが、警戒が厳しく引き返す。

- ・張家口を出発直後、天津、上海の新聞に池田一行が新疆入りをめざしていることが報道される。

中国人従者 4 名の護照発給から計画が漏洩

- ・その直前に関東軍司令部が奉天盛京時報社員・山本文治以下 6 名を新疆に向けて派遣したが、一行は蘭州で抑留。

また東亜同文書院学生・永福茂三郎が苦力に変装して単身、新疆入りを企てたが、包頭を出発後、途中で公安局員に阻止、引き戻される。

→日本側、諜報員を送ることができず、1 次情報を得られないまま

.....

3 北田公使と日英情報協力構想

1934（昭和 9）年、11 月、カーブルに日本公使館開設、北田正元が公使として赴任。

以後、1938 年 3 月まで 3 年 4 ヶ月にわたって新疆情報収集に尽力。

→状況が改善される

北田の情報源

- ・各国の外交官
- ・オープンソース（地元紙『イスラー』、英領インド、ソ連の新聞）
- ・インド経由で諜報者派遣
- ・ソ連領中央アジアからの亡命者、難民
- ・アフガニスタン首相、外相
- ・新疆からの亡命者

ムハンマド・エミン・ボグラ（1936年1月、通訳生・朝倉延寿を通じて極秘来訪）

「アミール、ホタンの手記」

- ・新疆南部における各勢力の兵力
- ・各州人口（従来伝えられるものよりもはるかに多数）
- ・産業、農業、生活、教育、家屋
- ・ムスリムの考え方、ソ連共産主義との思想的対立
- ・民族自決主義の状況
- ・ホータン政権、カシュガル政権樹立の経緯
- ・新疆をめぐる国際関係（南新疆一帯は反ソ主義が比較的強力であるが、北部中部はソ連の勢力が増大し、それが南部に延びようとしている形勢）
- ・新疆における赤軍の活動状況（ソ連は国際関係ならびに新疆住民に意を配り、慎重な態度をもって軍事を処理している）
- ・新疆と南京政府の関係

ボグラの内話

- ・北新疆のソ連勢力（増大せず減少）、回教勢力
- ・新疆には良い指導者がなく、各勢力が割拠し、相互に争い、統一されていない。
- ・新疆人民は宗教心が頗る強いが、自治独立の何たるかを解することができない。

ボグラの部下からの最新情報

- ・その後の南新疆の政治状況
 - ・南新疆におけるソ連の交易状況
 - ・カシュガル市内のソ連の宣伝
 - ・中国共産党員の動向
 - ・学校教師に対する共産主義の浸透具合
-
- ・1937年9月、ソ連軍が新疆南部を攻撃、東干軍、回教軍を分裂させた際の状況

- ・その後の情勢（赤軍正規部隊は入境しておらず）

→こうした北田情報は本省で重視され、タイプ印刷の上、一まとめにされ、主要大公使館、領事館、陸海軍に送付

●北田の情勢判断

- ・ソ連は新疆を経済的に支配するかたわら、住民と妥協し、平和裡かつ徐々にこれを勢力圏内に収め、ソ連領中央アジアの背後の安全を保障しようとしている。そのため今日まで、国際紛議を起こす危険を冒してまで赤軍の大部隊を進出させる必要は感じていない。ソ連は新疆の現状維持の継続を欲している（1937年3月7日付・在カーブル 北田公使より佐藤尚武外相宛）
- ・ソ連は、表面上はウルムチ政権を立てて行政・軍事を行わせ、自己はその陰にあって実権を握り、必要な計を行っている（1937年4月13日付・在カーブル 北田公使より佐藤尚武外相宛）

北田離任後

在カーブル日本公使館からの情報の質と量は大きく減退
英領インドの新聞に依拠するケースが多い

★北田の別の試み

① 北田公使、赴任早々からイギリスからの情報提供を狙う

- ・英領インド駐在武官の栗飯原秀中佐：インド政庁は在カシュガル英国総領事の報告書をもとにした「外交月報」の類を栗飯原に読み聞かせる形で情報を提供していた。

そのことを知った北田は、この報告書に目をつけ、1935（昭和10）年1月、在カーブル英国公使のマコナチー（Richard Roy Maconachie）にその写しの借覧を希望。
英公使は本国政府が了解すればこれに応じるとして照会することを返答

・マコナチー公使

北田は一度ならずやって来て、日本政府がソ連の新疆浸透を防ぐことの重要性を強調。ソ連の新疆浸透はインドに対して向かうものではなく、新疆、甘粛省から華中、華南に向かうものであるから、長江（揚子江）上の日本とイギリスの利益に脅威をもたらす。そこで日英両政府はこの新しい脅威に対処するために協力すべきである。

私的な手配として、在カシュガル英国総領事の送って来る報告書に記された情報を提供

してくれないかと依頼。

それと引き換えに中国とロシアのソースから得た情報を提供する。

マコナチー公使は、私的な手配というこの提案を断る。

一方、日英の情報協力についての判断は自分の権限を越えているので、本国に照会することを約束。

「この〔日英情報協力〕関係が不適切なことは予想される通りであるが、日本公使はそれをほのめかしても鈍感であり、並外れてしつこい」。

→北田の日英情報協力の提案は個人的なものではなく、外務省の了解を得た上でのものであったと考えられる。「在ロンドンの日本大使が近いうちに貴官に呼びかけるだろう」

→日本側にはそれ以前から日英協力の復活を求める声が出ていた。

- ・ 広田外相、第 65 回衆議院で、同じ海洋国家で地理的に類似の位置を占める日英の協力を主張（1934 年 1 月）
- ・ 荒木貞夫前陸相、イギリス大使館のメンバーに、ソ連に対抗する「何らかの共同行動」を行うべきだとして、日英提携を主張（1934 年 4 月）

→ソ連は日本のそうした動きを警戒

ソ連紙：「英日協定の幽霊がまだ続いている」、日英が秘密協定を結べば、日本はアジアで行動の自由をもてるようになると警告（1934 年 12 月）

北田提案に対する英外務省の反応

- ・ 適切に選ばれたニュースを非公式に交換するならば、それは英日双方にとって有益（Ronald Hall）
- ・ 情報を交換するという日本側の提案はソ連を「包囲する」という考えと結びついており、われわれがそうした方法で日本と協力するように見えるのは不当であろう。われわれはソ連の新疆浸透をそれほど心配する必要はない。ソ連の抗議を招くようなやり方で彼ら日本人に情報を与えるべきではない。（Alec W. G. Randall）
- ・ Randall 氏に賛成する。（Richard L. Speaight）
- ・ 私も賛成である。われわれとロシアの間にもめ事を起こすことになるだけである。（L. C.）

インド省

サミュエル・ホーア (Samuel John Gurney Hoare) インド大臣

そうした取り決めの採用することは慣習に反するだろうという理由で丁重に断るべきである。

インド政庁

われわれは、日本の提案は辞退するべきであることに賛成する。

→北田の日英情報交換の提案はイギリス側から謝絶された

② 北田はあきらめず再度提案 (1935 年 3 月)

マコナチー公使：

日本公使が再び問題を提起したので、私は指示されたように謝絶した。

インド政庁よりインド省宛

「日本は新疆におけるソ連に対抗して、われわれと協力することをうるさく求める」

③ 北田、英領インド情報をあきらめず

1937 年 1 月、インド休暇旅行の名目でデリーを訪問、インド外務長官、外務第一次官 (新疆及び極東方面の事項を担当) と会見

.....

④ 北田の提案が退けられたのち、1940 (昭和 15) 年 3 月に、今度はイギリス側から日英情報協力の構想が持ち上がる。

1940 年 3 月、クレイギー (Robert Leslie Craigie) 駐日英大使より日英情報交換の提案。

これを受けて、外務政務次官バトラー (Richard Austen Butler)、外務次官補シーモア (Horace James Seymour) が相談、日本政府と情報を交換するかもしれないという提案を内務省、インド省とともに進めることを決定。「そうした交換はすべての人にためになる」。

陸軍省

1926～29 年、われわれは非公式にロンドンの日本陸軍武官と情報の交換を行っていた。しかし日本の情報が明らかに誤り、あるいは少なくとも不正確なため、交換は停止した。

外務省

「ハリファクス外相（Edward Frederick Lindley Wood, 1st Earl of Halifax）はクレイギー大使提案のコミンテルンに関する日英情報協力に利点を見出す方向に傾いている。かつての陸軍省の非公式の取り決めに復活させる方法によって進めるのが良いと考えている」

MI5

コミンテルンのエージェントに関する日英情報交換の取り決めから得るところがあるとは考えていない。そうした取り決めに進むことは望ましくない。

→最終的に日英情報協力の構想は実現せず。

他方、日本はポーランド、ドイツへの接近を強める（以下、イギリスの見方）

- ・ポーランドに駐在武官 1 人とその補佐 2 名のほかに 4 人の日本将校が駐在。4 人のうち 1 名は陸軍大学、1 名はポーランド語を学習、2 名はワルシャワで歴史研究。約 30 人の日本将校が過去 12 ヶ月にポーランドを訪問（1935 年 2 月）。

- ・日本はドイツに接近、日独情報協力の協定が行われるのではないか。（1935 年 12 月）

.....

おわりに

- （1） 明治、大正期の外務省、陸軍はイギリス、中国と協力しながら新疆の情報を入手。
- （2） しかし新疆に諜報システムを築いておかなかったため、昭和期に入り新疆が政治的に混乱すると、1 次情報の獲得がほとんど不可能になり、苦慮する。
- （3） それでも中国の新聞などオープンソースを用いて、ある程度の状況把握はできた。ただしタイムラグが大きく、すぐに判断の材料となるものではなかった。
- （4） 諜報員の派遣は相次いで失敗（→中国の対日不信）
- （5） イギリスとの情報協力も拒絶される（→イギリスの対日不信）
- （6） そうした中でカーブルの北田公使は質量ともに高い新疆情報を入手したが、それらは日本人の諜報員がとらえたものではなかった。

→情報活動を行う人員の熱意とセンスが重要であるだけでなく、
同時に情報活動の前提として、良好な国際環境を築いておくことが重要